

12月4日

至聖なる我が女宰生神女永貞童女マリヤの進殿祭

晩課

首唱聖詠、大連禱、カフィズマ（悪人の謀）を歌う。小連禱に続いて

祭-1

▽祭日経 P1117

「主よ、爾によぶ」に八句を立てて左の讃頌を歌ふ、第一調。

主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や
われに聞きたま え 主や汝に呼ぶすみやかに我れに
いたりたまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え
主やわれに聞きたま え ねがわくはわがいのりは
香炉かろのかおりのごとく 汝がかはんはせのまえにのほり
わが手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん主や
われにききたま え

(句) 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

信者よ、今日我等祝ひて、聖詠と歌頌とを以て主を歌ひて、其聖にせられし幕、生ける匱、容れられぬ

言を容れし者を尊まん。蓋彼は身幼くして性に超えて主の前に進めらる、大なる司祭長ザハリヤは楽しみて彼を神の居所として接く。二次。

(句) 願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

(句) 主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん為なり。今日ハリストス我等の神の聖なる光栄の生ける殿、独女の中に祝福せられたる潔き者は律法の殿に進めらる、聖所に居らん為なり。イオアキム及びアンナは神^oを以て彼と共に歎び、童女の会は聖詠を歌ひ、主を讃め揚げて、彼の母を尊む。

(句) 主を望み、我が霊主を望み、彼の言を待む。

童貞女、神の母よ、爾は預言者の宣伝、使徒の光栄、致命者の令誉、悉くの地に生るる者の更新なり、蓋我等は爾に藉りて神と和睦するを得たり。故に我等、爾の祈禱を以て救はるる者は、皆爾が主の殿に進むを尊みて、歌を以て天使と偕に爾に呼ぶ、至浄なる者よ、慶べ。

(句) 我が霊主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

又讃頌、第四調。

聖にして無てんなる者は聖神^oに依りて至聖所の内に入れられ、聖なる天使を以て養はる。彼親ら我が聖なる神の至聖なる殿なり、其殿に入るを以て神は一切を聖にし、躓きたる人々の性を神成し給へり。

二次。

(句) 願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其の悉くの不法より贖はん。

(句) 萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

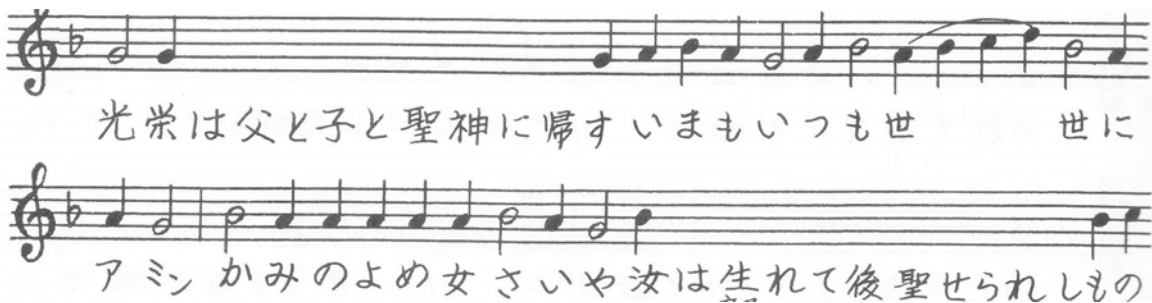
童女等は喜びて燭を執り、今日靈智の燭に先だちて、恭しく之を至聖所に送る。斯くして彼より言ひ難く輝き出でて、神^oを以て無知の暗に坐する者を照さんとする光を預め示す。

(句) 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

讃美たるアンナは呼べり、ザハリヤよ、神の諸預言者が神^oを以て備へし者を楽しみて接けて、之を聖殿に入れよ、神妙に養はれん為、彼が萬有の主宰の神^o聖なる宝座と、宮と、榻及び光れる居所と為らん為なり。

光栄、今も、第八調。

神の聘女、女宰よ、爾は生れて後、聖にせられし者として、至聖所に養はれん為に主の殿に来れり。其時ガウリイルも爾至りて無てんなる者に遣されて、爾に食を進めたり。天の者は皆驚きて、聖神^oが爾の中に居るを見たり。故に至浄至潔にして天上地下に讃栄せらるる神の母よ、我等の族を救ひ給へ。



としてしせい所_{ジョ}にやしなわれ_レがために主の堂_{ドウ}に来た_キ
 れりその時_{トキ}が_カリイルも汝_ニいたつて_テぎずなきものにつかわ
 されて_レな_ニぢに_ニはくをあたえた_リ天の門はみな聖神
 が汝のうちにおるをみておどろけ_リゆえに天上_{テンジョウ}地下_{チカ}に
 讃揚_{サンヨウ}せらる_ルる_ル至_イと清くしてけがれなきかみのはは
 や我等のやからをすくいたま_エえ

→通常部分 (P7/8「聖にして福たる」へ戻る)

(ポロキメンの後)

祭-2

パレミヤ (旧約聖書の読み) ▽祭日経 1119

エジプトを出づる記の読。(四十章)。

主はモイセイに告げて曰えり、正月元旦に爾證詞の幕を建て、其の中に匱を置き、帷幔を以て之を蔽い、又案及び其の燈臺を攜え入り、證詞の匱の前に香を焚かん為に金の香壇を置き、帷幔を證詞の幕の門に懸け、又傅膏を取り、幕及び其の一切の物に傅りて、此れ及び其の諸々の器を聖にせよ、然らば聖と為らん、又祭壇を聖にせよ、然らば祭壇は至聖と為らん。モイセイは主神イズライリの聖なる者の命ぜし如く、皆之を行えり。雲は證詞の幕を蓋いて、主の光栄幕に盈ち、モイセイ證詞の幕に入ること能わざりき。雲其の上に止まり、主の光栄幕に盈ちたればなり。

列王紀の読。(第三卷八章)。

ソロモンは主の堂を作る業を竣えて、イズライリの衆長老をシオンに集めたり、主の約匱をダビデの城、即シオンより攜え上らん為なり。司祭等は主の約匱と、證詞の幕と、證詞の幕に在る諸聖器とを取

れり。王及び衆イズライリは匱の前に行き、司祭等は主の約匱を昇きて、其の處、即堂の内殿なる至聖所の中ヘルウィムの翼の下に置きたり。蓋ヘルウィムは其の翼を匱の上に舒べ、且ヘルウィムは上より匱及び其の聖物を蔽えり。匱の内には二つの約碑、即主が約を立てし時、モイセイがホリフに於て彼處に蔵めたる者の外、何者も有らざりき。司祭等聖所より出でて後、雲主の堂に盈ち、司祭等雲の為に立ち奉事すること能わざりき。光榮は主神全能者の堂に満ちたればなり。

イエゼキイリの預言書の読。(四十三、四章)。

主是くの如く言ふ、八日に至りて後、司祭等は爾等の燔祭と酬恩祭とを壇の上に献げん、而して我爾等を納れん、主神は此れを言う。彼我を引きて聖所の東に向かえる外の門に返れるに、門閉ざされたり。主我に謂えり、此の門は閉ざされて開かれざらん。何人も此れより入るを得ざらん。蓋主イズライリの神は此れより入りたり、此れ永く閉ざされん。君は其の君たるに因りて、此の内に坐して、主の前に餅を食らはん、彼は門の廊の路り入り、又其の路より出でん。彼又我を引きて北の門の路より堂の前に至れり。我觀しに、視よ、光榮は主の堂に満ちたり。

通常部分 P10 重連禱へ戻る

(増連禱が終わったら)

祭-3

リティヤのスティヒラ

▽祭日経 1120

「リティヤ」に讃頌。1 調 (ニコミディヤのゲオルギイの作)。

我が神の至榮至大なる業に因りて、／今日上天は喜び、／雲は楽しみを雨らすべし。／蓋視よ、東に向ふ門は胎荒れて果なき者より許約に循ひて生れ、／神の居所の為に献ぜられて、今日無てんの礼物として殿に攜へらる。ダウィドは喜びて、／琴を弾ずべし、／彼が曾て、王の女は進められ、其伴たる童女は彼に従ひて、／王の殿に入らんと日ひし如く、／今童貞女は神の幕に進められて、／聖所の内に入り給へり、／此に養はれて、／世の無き先に測り難く父より生れし者、／我が靈の救主の居所と為らん為なり。

いま我が神の至榮至大なる事によつて上天はよろこ
びくもはたのしみをくだすべしけだし見よ東に向う門は胎
あれて実なきものよりきやくにしたがいてうまれ
神にそのすまいとして献ぜられいまきずなき捧物の

ごとく堂にたづさえらる ダヴィードは喜^{ヨロコ}びて琴^{コト}を弾^{ヒキ}ず
 べ しか れが^レか^カつて王^{オウ}の女^メはすすめ^{シユ}られ^レその^ソとも
 たる童^{ドウ}女^メはかれ^カれに^ニした^シが^ガいて王^{オウ}の^ノ殿^{テン}に^ニ入^イら^ラん^ンと言^イい
 しごとく今童貞女は神の堂にすすめられてせい所^{シヨ}
 に入^イりたり^リここ^{ココ}に^ニ養^{ヤシナ}われて世のなき先にはかりがたく
 ちちより生まれしものわがたましいの救^{キユウ}主^{シュ}のすまいと
 ならんがためな り

第四調

今日かみを容るる殿たる生神女は主の殿に攜へられ、ザハリヤは之を接く。今日至聖所は欣び、天使の会は奥密に祝ふ。彼等と偕に我等も今日祭を為して、ガウリイルに従ひて呼ばん、恩寵を蒙れる者、慶べよ、大なる憐を有つ主は爾と偕にす。

信者皆来りて、独一無てんなる者、諸預言者より伝へられ、殿に進められ、世の無き前より預定せられたる母、末の時に現れし生神女を讃め揚げん。主よ、彼の祈祷に因りて、爾の平安と大なる憐とを我等に與へ給へ。

光栄、今も、第五調。(レオント、マイストルの作)。

喜ばしき日、最尊き祭は輝けり、蓋今日生む前にも生む後にも童貞女たる者は主の殿に攜へらる。翁ザハリヤ、前驅の父は喜び、楽しみて呼ぶ、憂ふる者の轉達者は聖殿に近づけり、聖なる者として萬有の王の居所に献ぜられん為なり。父祖イオアキムは楽しみ、アンナは喜ぶべし、三歳の牝犢の如く、無てんなる女宰を神に献げたればなり。諸の母よ、共に喜べ、童女等よ、楽しめ、胎の荒れたる者よ、共に祝へ、蓋預定せられし女王は我等の為に天の國を啓き給へり、人々よ、喜びて楽しめ。

→通常部分へ戻る。 P11 リティヤへ

(リティヤが終わったら)

祭-4

挿句のスティヒラ

第5調。▽祭日経 1122

天地は喜ぶ、靈智の天たる獨一無てんの童貞女が尊く育はれん為に神の家に来るを見ればなり。ザハリヤは奇として彼に呼べり、主の門よ、我爾の為に殿の門を啓く、此の内に喜びて祝へ、蓋我認め且信ず、イズライリの救は今明に顕れん、世界に大なる憐を賜ふ神言は爾よれ生れん。

句、彼の伴たる童女は彼に従ひて爾の前に進めらる。

誠に神聖の恩寵たるアンナ恩寵より賜はりたる潔き永貞童女を楽しみて神の殿に攜へ、小女等を招きて、燭を執りて其前に行かしめ、且曰ふ、子よ、往きて、爾を賜ひし者の為に礼物及び馨しき乳香と為れ。入るるべからざる所に入りて奥秘を識れ、世界に大なる憐を賜ふイイススの為に楽しく美しき居處と為るに己ほ備へよ。

句、彼等は楽しみ祝ひて導かれ、王の殿に入る。

神を涵るる殿たる至聖なる童貞女は神の殿の内に進められ、少女等は今燭を執りて彼に前行す。尊榮なる親の一ぐうイオアキム及びアンナは楽しみて、造成主を生みし者を生みたるを祝ふ。至りて無てんなる者は神聖なる幕の内に喜びて廻り、天使の手に養はれて、世界に大なる憐ほ賜ふハリストス母と現れたり。

光榮、今も、第六調。(セルギイアギオポリトの作)。

今日我等信者の会は集まりて、神^oを以て祝ひ、主の殿に攜へらるる神女童貞生神女、萬有の王ハリストス神の居所として萬族の中より預め選ばれたる者を敬虔に讃め揚げん。少女等よ、燭を執りて前行して、永貞童女の尊き進を崇めよ、母たる者よ、一切の憂を除き、喜びて、神の母と為りたる、世界に歡喜を得しむる者に従へ。皆喜ばしく天使と偕に恩寵を蒙れる者に慶べよと呼ばん、彼常に我等の靈の為に祈ればなり。

→通常部分 P13「シメオン祝文」へ戻る

「聖三祝文」「至聖三者」「天主経」

司祭 ^{けだし}蓋 国と権能と光榮は爾父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」

(アミンに続いて)

祭-5

祭日のトロパリ 3回

▽祭日経 1123→1117

今日神の恩恵は示され、人々の救は伝へらる、童貞女は明かに神の殿に現れて、預めハリストスを衆人に知らしむ。我等も声を揚げて彼に呼ばん、造物主の思慮の成就なる者よ、慶べ。

今神の恩恵は示めさ れ人の救いは伝えらる童貞女
オンケイ シ スク ッタ

はあきらかに神の堂にあらわれてあらかじめ分トを
カミ ドオ

衆人に知らしむ我等も声をあげてかれに呼ばん
ジュウジン シ

造物主の思慮の成就となる者や、よろこべ
おもんばかり

→通常部分 P14「願わくは主の名は崇めほめられ……」へ戻る。

早課

来たれ…、六段の聖詠、大連禱に続いて
 <カフィズマ、セダレンは省略>

祭-6

主は神なり、祭日トロパリ

▽祭日経 P

<【主は神なり】日本では3回だが、本来は下記の句に続いて4回。第4句に続いてトロパリ。>

主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、

主は神なり我等を照らせり主の名によつてきたるものは
テ

あがめほめらる

今神の思恵オンケイは示シめされ人の救スクいは伝ツタえらる童貞女
 はあきらかに神の堂カミにあらわれてあらかじめト分スを
 衆人シュウジンに知シらしむ我等も声をあげてかれに呼ユばん
 造物主の思慮おもんばかりの成就となる者や、よろこべ

<カフィズマ省略>

→通常部分へ戻る P17【ポリエレイ】へ

<坐誦讃詞省略> ポリエレイに続いて讃歌

祭-7

【讃歌】（讃歌はロシア系のみのもので祭日経には出ていない。▽[接続歌集 P342](#)）

（ズナメニイのメロディによる）

Sputnik Psalmschik

至 聖 な ー る 童 貞 ー 女
 か みの え ら び た る 少 女 よ
 わ れ ら な ん じ を 讃 揚 し て
 な ん じ が 主 の 殿 に 入 る を 尊 と む

主は大いにして、我が神の街に、其の聖山に讃揚せらる。
 シオン山は美しき高所にして、全地の喜びなり。（以下略）

光榮、今も、「アレルイヤ」、三次。

→通常部分 P18 へ戻る

【小連禱】【アンティフォン】 4 調

祭-8

提綱、第四調。▽祭日経

提綱、第四調。

女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ。句、我が心善言を湧き出せり。

ポロキメン Sputnik Psalmschika

おんなよ、これを聴き これを見、 爾の耳をかたむけよ

輔祭 主に祈らん、(詠) 主憐れめよ

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、(2回半)

輔祭 (句) 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ、

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、(2回半)

輔祭 凡そ呼吸ある者は

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、(2回半)

輔祭 我等に聖福音経を聴くを賜うを主・神に禱らん、

(詠) 主憐れめよ、3次

輔祭 睿智肅みて立て、聖福音経を聴くべし、

司祭 衆人に平安、

(詠) 爾の神にも、

司祭 ルカ伝の聖福音経の読み、

(詠) 主や、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

福音経はルカ四端。

彼の日マリヤ起ちて、丞に山地に適き、イウダの邑に至り、ザハリヤの家に入りて、エリサウェタに安を問へり。エリサウェタ マリヤの安を問ふを聞きし時、胎児其腹の内に躍れり。エリサウェタ聖神に満てられ、大聲に呼びて曰へり、爾は女の中に祝福せられたり、爾の腹の果も祝福せられたり。我が主の母我に臨めり、我何より此を得たるか。蓋爾が安を問ふ聲の我が耳に入りし時、胎児我が腹の内に喜び躍れり。信ぜし者は福なり、蓋主より彼に告げられし事は必成らん。マリヤ曰へり、我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり、蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと謂はん。

蓋権能者は我に大なる事を成せり、其名は聖なり、

(詠) 主や、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

50 聖詠 読む (交替で祝福を受けに行く)

続いて

祭-9

福音後のステヒラ

▽祭日経 1125

第五十聖詠の後に「生神女の祈祷に依りて」に代へて歌ふ、光栄、第二調。

今日大なる王の生ける殿は、彼の神聖なる居所に備へられん為に、殿に入る、人々よ、楽しみ。今も、同上。次ぎて「神よ、爾の大なる憐に因りて」。

(ステヒラ)(ハリストスの復活を見て)の后に

光栄は父と子と聖神に帰す 今大王の生ける堂は
彼の神聖なるすまいにそなえられんが為に堂に入る
人々よたのしめよ いまもいつも世々にアミン
今大王の生ける堂は彼れの神聖なるすまいに
そなえられんが為に堂に入る 人々よたのしめよ
神や汝の大いなるあわれみによって我れをあわれみ
汝が恵みの大きによつてわれの不法を消したまえ

讃頌、第四調。

今日神を容る殿たる生神女は主の殿に攜へられ、ザハリヤは之を接く。今日至聖所は欣び、天使の会は奥密に祝ふ。彼等と偕に我等も今日祭を為して、ガウリイルに従ひて呼ばん、恩寵を蒙れる者、慶べよ、大なる憐を有つ主は爾と偕にす。

→通常部分 P20 へ戻る 【輔祭「神よ、爾の大いなる憐れみによって…」と「主憐れめよ」12回】
(アミンに続けて)

祭-10

カノン

▽祭日経 P1126

★進堂祭ではイルモスのほかに、各歌頌の最後に共頌歌（カタワシヤ）として降誕祭のイルモスを歌うように指定されている。ここでは進堂祭のイルモスを各歌頌の最初に、最後に降誕祭のイルモスを掲載した。省略は適宜。

第一の規程、ゲオルギイの作。第四調。「イルモス」と共に八句に、「イルモス」二次、讃詞六句に。其冠詞は、女宰よ、爾言に恩寵を與へよ。

第一歌頌

イルモス、我が口を開きて、聖神^oに満てられ、言を女王母に奉り、楽しみ祝ひ、喜びて其進殿を歌はん。



我が口を ひらきて 聖神に 満てら れ 言を女王母に
たてまつり 楽しい わい 喜びてその 進殿を うたわん

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。

純潔なる者よ、我等爾を承け認めて睿智の宝蔵及び恩寵の竭きざる泉と為す。女宰よ、求む、爾の智慧の滴を我等に注ぎ給へ、常に爾を讃め歌はん為なり。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を與へよ。

至浄なる者よ、爾は諸天に超ゆる殿及び宮として神の殿に入り給へり、彼の来臨の時に其神聖なる居處と為るに備へられん為なり。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を與へよ。

生神女は恩寵の光を放ち衆人を照して、歌を以て其光明なる慶賀を讃揚せん為に之を集め給へり、来りて此に與らん。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

至榮にして意念の過ぎ難き門は、神の殿の門を啓きて、今我等、共に集まりし者に、其神聖なる奇蹟を楽しまんことを勧め給ふ。

<第2のカノンは省略、以下同様>

共頌歌として降誕祭のイルモスを歌う

ハリストス 生まる あがめ 讃めよ ハリストス天よりす むかえよ

ハリストス地 にあり あがれよ 地 こぞりて 主にうたえよ

ひとびとよ 楽しみて 讃めあげよ 彼光栄を顕したればなり。

第三歌頌

イルモス、生神女、生活にして盡きざる泉よ、祝ひて爾を讃め歌ふ者の霊を固め、彼等に爾の尊き進殿に依りて栄冠を冠らしめ給へ。

生神女、生活にしてつきざるいずみよ 祝いて爾を讃め歌う者の霊を

かた - め 彼等に爾の進殿によりて 栄冠を こうむらしめ たまえ

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。

殿は今聘女の最美しき居處、童貞女の宮と顕れたり、神の生ける宮、清浄無垢にして一切の造物より光明なる者を受けられたればなり。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。

至浄なる者よ、ダウィドは預め祭を始めて、我等と偕に楽しみ祝ひ、爾純潔なる者を光明に妝ひたる女王、殿に於て王及び神の前に立てる者と稱ふ。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。

婦より昔人類の中に罪は生まれり、亦婦より救贖と不朽とは生じたり、是れ今日神の殿に進めらるる生神女なり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

純潔なる者よ、天軍と衆人の会とは今日喜びて燭を執り、爾の前に行きて、爾が神の家に於て偉大なるを唱ふ。

共頌、世の無き前に分離なく父より生れし子、末の日に種なく童貞女より身を受けしハリストス神に呼ばん、我等の角を高くせし主よ、爾は聖なり。

世のなきさきに ^{わかれ}分離なく 父より 生まれし子
 すえの日に たねなく 童貞女より 身を受けし
 ハリストス かみに呼ばん 我等の角を たかくせし主や
 なんじは 聖なり

<坐誦讃詞は省略>

第四歌頌

イルモス、預言者アウクムは爾至上者が童貞女より身を取り給ふ神の測り難き定制を洞察してよべり、主よ、光栄は爾の力に帰す。

預言者アウクムは 爾至上者が童貞女より 身を取りたまう
 神の測りがたき 定制を洞察してよべり 主よ光栄は爾のちからに帰す

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。
 神の家は今日過られぬ門を受けて、悉くの律法の奉事を絶つ、地に居る者に誠に眞實は頭れたりとよべばなり。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。
 昔アウクムが預見せし樹蔭繁き山、殿の内の入るべからざる所に入りたるを預言せし者は諸徳の花を發きて、地の極を覆ふ。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。
 全地は至榮にして天然に超ゆる奇妙なる事を觀るべし、如何二童貞女は天使より糧を受けて、己の上に神の摂理の徴を顕す。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン
 王及び神の純潔なる聘女よ、爾は殿と宮、及び生ける天と現れて、今日律法の殿に獻ぜらる、神の為に守られん為なり。

共頌、イエッセイの根より生ぜし枝及び其花なる讚美たるハリストスよ、爾は童貞女より出で給へり。形なき者且神よ、爾は夫に適かざる者より身を取りて、樹蔭繁き山より来給へり。主よ、光栄は爾の力に帰す。

イエッセイの根より 生ぜし 枝及びその はなる 讚美たる
 ハリストスよ 爾は 童貞女より 出でたまえり かたちなき者
 かつかみや なんじは 夫に 適かざる者より 身を取りて
 樹蔭こかげ 繁き山より 来たりたまえり 主や 光栄は 爾に帰す

第五歌頌

イルモス、萬物は爾が尊き進殿に驚かざるなし、爾婚配を識らざる童貞女は至淨き殿にして、神の殿の内に入りて、凡そ爾を歌ふ者に平安を賜へばなり。

萬物は爾が尊き進殿とおと しんでんに 驚かざるなし 爾婚配を識らざる 童貞女は
 至と淨き殿きよにして 神の殿の内に入りて 凡そ爾を歌う者に
 平安を 賜え ばなり

至淨なる童貞女は、至榮の聖物、聖にせられし献物の如く、今日神の殿に進められて、萬有の王、唯一の吾が神の居處として守らる、彼の親ら知るが如し。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を與へよ。

至淨なる者よ、昔ザハリヤは爾の靈の美しきを洞察して、信を以てよべり、爾は拯救、爾は衆人の歡喜、爾は我等の喚起なり、爾に藉りて近づかれぬ者は我の為に近づかるる者と現れん。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を與へよ。

純潔なる者よ、爾の奇蹟は何ぞ悟り難き、爾の誕生は奇妙なり、爾の生長の状は奇妙なり、神の聘女よ、爾に於て一切奇妙にして至栄なり、人々の為に測り難し。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

神の聘女よ、爾は多くの光ある燭臺の如く、今日主の家に輝けり、潔淨にして讚美たる生神女よ、爾は我等をも爾の奇蹟の尊き賜にて照し給ふ。

共頌、和平の神、仁慈の父よ、爾我等に和平を賜ふ爾の大なる議事の使者を遣はし給へり。故に我等神を知る光に導かれて、夜過ぎて朝に爾人を愛する主を崇め讚む。



和平の神 仁慈のちちよ なんじ われらに 和平を たまう
爾の 大いなる 議事の 使者を 遣わせ たまえり。 故に 我等
神を知る 光に みらびか れて 夜す ぎて あさに
爾 人を愛する 主を あがめ 讚 - む。

第六歌頌

イルモス、神の信者よ、来りて、神の母の此の神妙なる至りて尊き祭を祝ひ、手を拍ちて、彼より生れし神を讚栄せん。



神の 信者よ 来たりて 神の母の この神妙なる至りて尊き祭をいわ - い
手を 打ちて 彼より 生まれし 神を 讚 栄 せん

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を與へよ

言を以て萬物を持つ者は義人の祈禱を聆けり、故に慈憐なる主として、彼等を産まざる疾より解きて、歡喜の原因を賜へり。

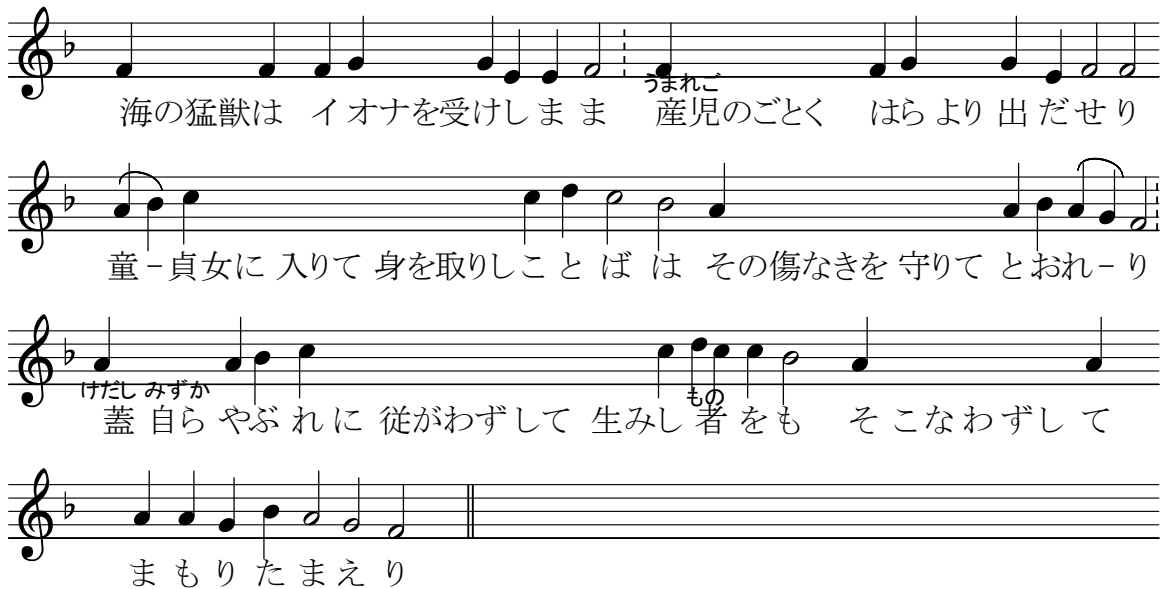
(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を與へよ。

主は諸民に其救を示さんと欲して、今人々より婚姻に與らざる者を和睦及び改新の徴として受け給へり。至浄なる者よ、爾は神の言ひ難き摂理の宝を蔵めたる恩寵の家として、殿に在りて不朽の樂に與り給へり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

神の聘女よ、殿は爾を王の冠の如く受けて、照されて、是より更に善き事に己を備へたり、爾に於て預言の應へるを見たればなり。

共頌、海の猛獸はイオナを受けしまま産児のごとく腹より出せり。童貞女に入りて身を受けし言は其の傷なきを守りて通れり、蓋自ら壞に從はず、生みし者をもそこなはずして守り給へり。



The musical score consists of four staves of music in a single system, all in a key signature of one flat (B-flat major or D minor). The lyrics are written below the notes. The first staff begins with a treble clef and a B-flat key signature. The lyrics are: 海の猛獸は イオナを受けしまま 産児のごとく はらより 出だせり. The second staff continues: 童-貞女に入りて 身を取りしことばは その傷なきを守りて とおれ-り. The third staff continues: 蓋 自ら やぶれに 從がわずして 生みし者をも そこなわずして. The fourth staff concludes with: まもりたまえり. There are some small annotations above certain notes: 'うまれ' above the note for '産児', and 'けだしみずか' above the note for '蓋'.

小讃詞、第四調。

救世主の最浄き殿、至りて貴き宮、神の光榮の聖にせられし宝蔵たる童貞女は今日主の家に入れられて、聖神^oの恩寵を共に入らしむ。神の使等は彼を歌ひて曰ふ、此の天の幕なり。

同讃詞

我は神の言ひ難き神妙なる秘密の恩寵が童貞女に於て現れ、且明に成就せらるるを見て喜ぶ。惟何如にして選ばれたる潔き者は独見ゆると見えざる一切の造物より上なる者と現れしか、此の奇妙なる言ひ難き法を悟る能はず。故に彼を讃美せんと欲して、智慧と言とに於て甚懼る、然れども毅然として伝へ、崇めて曰ふ、此れ天の幕なり。

第七歌頌

イルモス、敬虔の者は造物主に易へて造物に事ふることをせざりき、火の嚇を勇しく踐みて、喜び歌へり、讃美たる主、先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。



(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を與^{あた}へよ。

視よ、今日我等の靈と意志と智慧とを恩寵にて照す欣ばしき春は地の極に輝けり。今日生神女の祝祭を奥密に楽しむべし。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を與^{あた}へよ。

天し地、天使の軍と人々の会は今日均しく女王神の母に尊榮を献りてよぶべし、喜と救とは殿に入れらる。

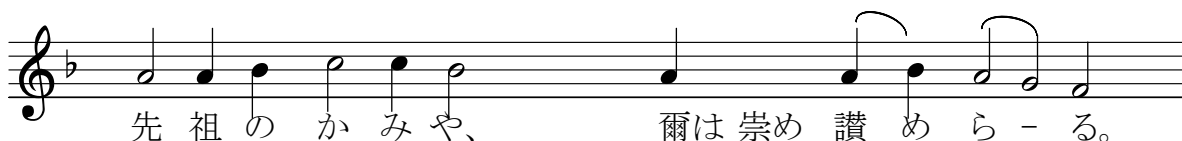
(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を與^{あた}へよ。

至浄にして恒に讚美たるル童貞女母よ、爾が神の殿に入りし時、文の律法は過ぎ去りて、影の如く消え、恩寵の光線は輝けり。

光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

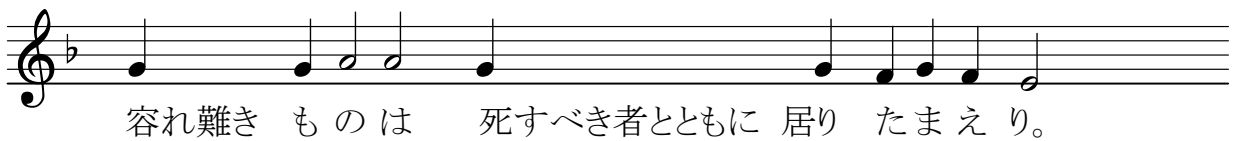
純潔なる者よ、天と地と地獄とは爾の産を造物主及び神として、之に順ひ、悉くの地上の者の舌は主我等の靈の救者現れたりと承け認む。

共頌、偕に敬虔に養はれし少者は、不虔の命を顧みずして、火のおどしを恐れず、乃焰の中に立ちて歌へり、先祖の神よ、爾は崇め讚めらる。



第八歌頌

イルモス、少女、浄き童貞女よ、聴け、ガウリイルは至上者の原始の真の旨を伝へん、神を受けん為に己を備へよ、蓋爾に藉りて容れ難き者は死すべき者と偕に居り給へり。故に我喜びてよぶ、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。



(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。

昔アンナは至浄き殿を神の家に攜へ来りて、信を以て司祭に呼びて曰へり、神より我に賜はりし子を今受けて、爾の造物主の殿に入れ、且喜びて彼に歌へ、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。

昔ザハリヤは神[°]に藉りて洞察してアンナに謂へり、爾は生命の真の母、神の諸預言者が明に生神女と伝へし者を攜へ来り、如何にして殿は之を容れん、故に我奇としてよぶ、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。

アンナ之に對へて曰へり、我は神の婢なり、求む、信と祈祷とを以て我が産苦の果を受けよ、受けて後生れし者を之に賜ひし主に献げよ、故に我高声によぶ、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

(冠詞) 女宰よ、爾言に恩寵を^{あた}與へよ。

司祭之に謂へり、此れ誠に法に合ふ事なり、唯我は神の家に進めらるる者の神妙に恩寵を以て聖所に勝れるを見て、甚異しむ、故に喜びてよぶ、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

アンナ之に謂へり、我爾の言ふ所を聴きて勇めり、蓋爾は童貞女の事に於て明に伝へし所を聖神[°]に藉りて悟れり、故に至浄なる者を爾の造物主の殿に接けて、喜びて彼に歌へ、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

司祭呼びて曰へり、光明なる燈、最大なる禧を殿に輝かす者し我等の為に燃されたり、諸預言者の靈は、神の家に行はるる至榮の事を観て、我と偕に喜びて、常によぶべし、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

我等主を讃め、崇め、伏し拝みて、世々に歌ひ讃めん。

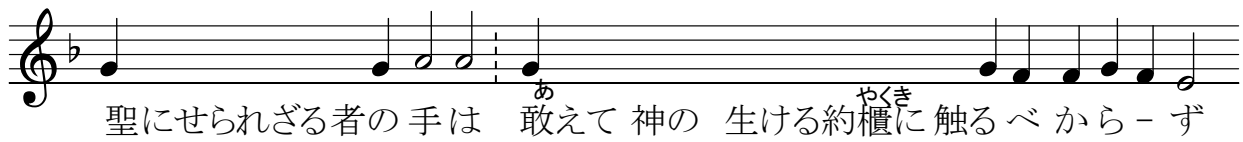
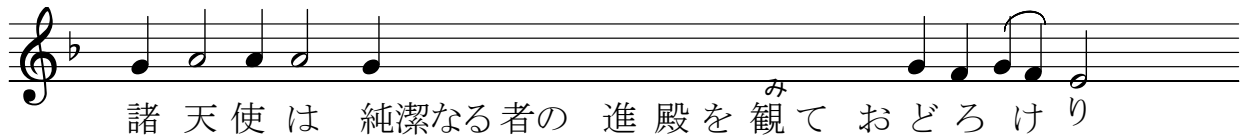
共頌、露を出す爐は天然に超ゆる奇蹟の象を顕せり、蓋受けし所の少者を焚かず、神性の火が入りし所の童貞女の腹を焚かざる如し。故に我等歌ひて呼ばん、悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。



第九歌頌に「ヘルウィムより尊く」を歌はずして祭日の附唱を歌ふ、諸天使は至浄なる者の進殿を觀て驚けり、如何にして童貞女は至聖所に入りたる。次ぎて「イルモス」、「聖にせられざる者の手は」。左列の詠隊同じく此の附唱及び「イルモス」を歌ふ。毎讃詞にも祭日の附唱、両詠隊更之を歌ふ。

第九歌頌

イルモス、聖にせられざる者の手は敢て神の生ける約櫃に触るべからず、唯信者の口は黙さずして天使の生神女に告げし言を歌ひ、喜びてよぶべし、潔き童貞女よ、爾は實に萬衆に超えたり。



諸天使は純潔なる者の進殿を観て驚けり、如何にして光栄を以て至聖所に入りたる。

潔き生神女よ、爾は靈の輝ける潔淨を有ち、天より神の恩寵に満たされし者なるに因りて、常に永在の光を以て人々を照して、楽しみてよばしむ、潔き童貞女よ、なんじは實に萬衆に超えたり。

諸天使は童貞女の進殿を観て驚けり、如何にして神妙に至聖所に入りたる。

潔き生神女よ、爾に於ける奇蹟は言の力に超ゆ、蓋我爾の身を言ひ難く罪の汚に與らざる者と承け認む。故に慎みて爾によぶ、潔き童貞女よ、爾し實に萬衆に超えたり。

諸天使及び人々よ、童貞女の進殿を尊まん、光栄を以て至聖所に入りたればなり。

潔き者よ、律法は奇妙に爾を預象して、幕と神聖なる壺、奇異なる約櫃と帷と杖、毀たれぬ殿及び神の門と為せり。故に訓へて爾に向ひてよばしむ、潔き童貞女よ、爾は實に萬衆に超えたり。

諸天使は童貞女の進殿を観て驚けり、如何にして神の悦に合ひて至聖所に入りたる。

ダワイドは爾が妝はれて神の右に立てるを見、徳の美しきに因りて爾を王の女と名づけ、歌を以て爾を讚榮せり、故に預言してよべり、潔き童貞女よ、爾は實に萬衆に超えたり。

諸天使よ、諸聖人と偕に慶賀せよ、童女等よ、偕に歌頌せよ、神女が至聖所に入りたればなり。

ソロモンは爾が神を受けしを預見して、爾を王の榻、封印せられし活ける泉と名づけたり、此の泉より我等の為に浄き水は流れて、我等に信を以てよばしむ、潔き童貞女よ、爾は實に萬衆に超えたり。

<以下略>

諸天使は純潔なる者の進殿を観て驚けり、如何にして光栄を以て至聖所に入りたる。

イルモス、我奇異にして至栄なる秘密を瞻る、洞は天と為り、童貞女はヘルワィムの宝座と為り、芻槽は容れ難きハリストス神の臥し給ふ置き所と為れり、我等歌ひて、彼を讚め揚ぐ。

生神女進室祭のカタワシヤとして



光耀歌

昔預言者の会が壺と杖と石板、及び截られざる山として預象せし神女マリヤを我等信を以て崇め讃めん、蓋彼は今日至聖所に入れらる、主の為に養はれん為なり。三次。

祭 11

【讃揚歌とスティヒラ】 ▽祭日経 1149

4調で「凡そ呼吸ある者」を歌う。(本来 148、149、150 聖詠誦読し、末尾にスティヒラを挿入するが、通常省略され) 生神女讃詞を歌う。



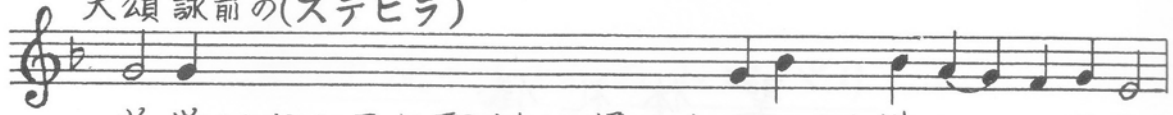
およそ いきあるものは主をほめあげよ 天より主
 をほめあげよ いとたかきにかれをほめあげよ
 ほめ歌は汝かみにきす そのことごとくの神使や
 かれをほめあげよ そのことごとくの軍グンやかれをほめあ
 げよ ほめ歌は汝かみに帰キす

<スティヒラ省略>

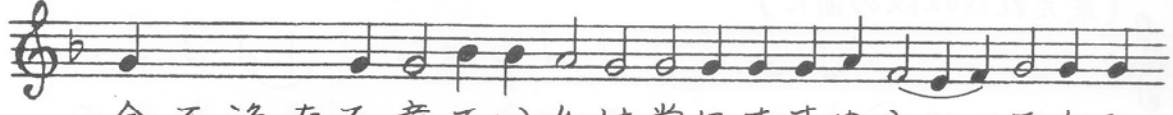
光栄、今も、第二調。

今日至りて無てんなる童貞女は殿に進めらる、神萬有の王、我等の生命の養育者の居所と為らん為なり、今日最潔き聖者は三歳の牝犢の如く、至聖所に入れらる。我等天使に效ひて彼に呼ばん、独女の中に祝福せられたる者よ、慶べ。

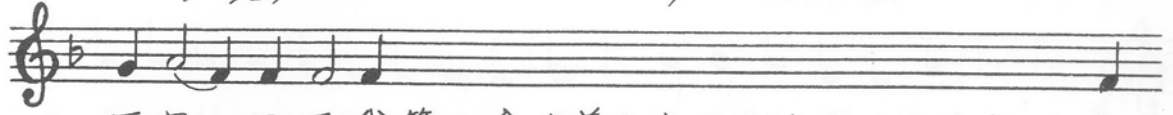
大頌詠前の(ステヒラ)



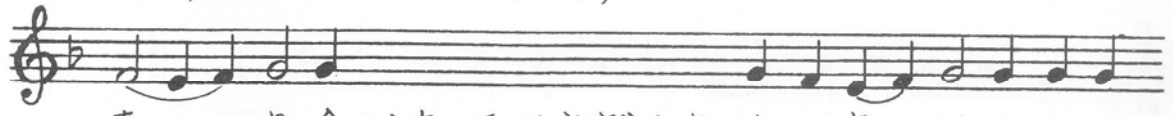
光榮は父と子と聖神に帰す今もいつも世々にアミン



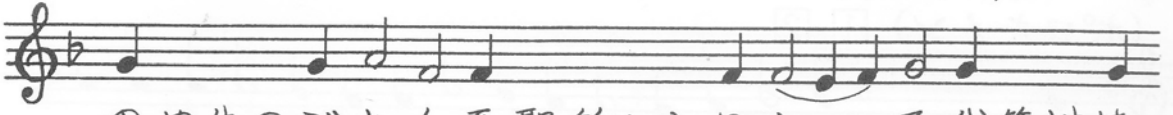
今至_シ浄_{ジヨウ}なる童てい女は堂_{ドウ}にすすめらるかみ



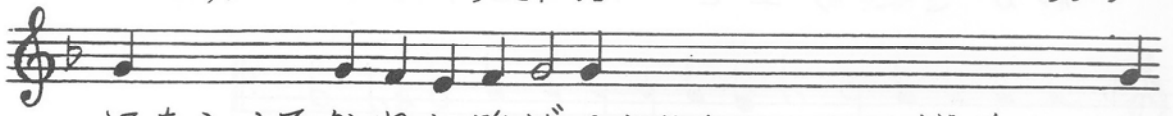
万有_{マンユウ}の王我等の命_{イタ}を養_{ヤシ}うもののすまいとならんため



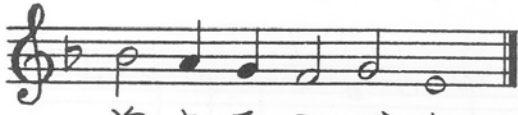
なり今いたっていさぎよきせい者_{シヤ}は三_{サン}さい



のめ牛のごとく至聖所_{シセイジョ}に入れらる我等神使_{シンシ}



にならいてかれに呼ば_{オナ}ひとり女のうちに讚美_{サンビ}たる者



やよろこべよ

→通常部分 P22 に戻る 【大詠頌】を歌う

大頌栄、「聖なる神」を歌った後

祭 12

【祭日トロパリ】

山 神 工 は 仰 は り 天 殿 に し

今神の恩恵は示めされ人の救いは伝えらる童貞女
 はあきらかに神の堂にあらわれてあらかじめ分トスを
 衆人に知らしむ我等も声をあげてかれに呼ばん
 造物主の思慮の成就となる者や、よろこべ

→通常部分 P27 に戻る

【重連祷、増連祷】 早課の終わり。発放詞。

一時課

<一時課の変更箇所は、トロパリコンダクのみ>

トロパリ

今日神の恩恵は示され、人々の救は伝へらる、童貞女は明かに神の殿に現れて、預めハリストスを衆人に知らしむ。我等も声を揚げて彼に呼ばん、造物主の思慮の成就なる者よ、慶べ。

コンダク

救世主の最浄き殿、至りて貴き宮、神の光栄の聖にせられし宝蔵たる童貞女は今日主の家に入れられて、聖神^oの恩寵を共に入らしむ。神の使等は彼を歌ひて曰ふ、此の天の幕なり。